

1. 「“中国残留孤児”の社会学」
2. 「“中国残留婦人”を知っていますか」
3. 「日本に引き揚げた人々」
4. 「川島芳子 知られざるさすらいの愛」
5. 「はじめてのノモンハン事件」

## 1. 「“中国残留孤児”の社会学」 張嵐著 青弓社 10月16日

副題：「日本と中国を生きる3世代のライフストーリー」

この本は、中国残留孤児に関する従来のモデル・ストーリーを問い直す野心作であり、一読に値する。

張嵐氏は、まず満州移民の当時の状況について、「日本人満州移民の入植のために、1942年末まで、満州拓殖公社と満州国開拓総局によって移民用地として買収された既耕地は、実に2千万ヘクタールを超える面積（現在の日本の面積の半分以上）となった。満州移民が既耕地に入ったために、現地住民が余儀なくよそへ移住しなければならなかった。また、農業用地だけではなく、住んでいた家屋も同時に買収されているケースも現れた。生活を奪われた一部の現地住民は、日本人の小作農、雇農に変わるしかなかった。日本人の“満州”移民農業用地の買収は、現地住民に大きな被害をもたらし、現地住民の激しい反発を買い、様々な反対運動を巻き起こした。そのなか、土龍山農民蜂起が日本人満州移民に大きな打撃を与えたが、関東軍によって鎮圧された。その後、大規模な武装蜂起はなかったが、小集団または個人による反対運動が多くおこなわれた。一方、満州移民は優越感から、“現地住民の生活習慣ひいては文化を劣ったもの”とみなし、現地生活習慣になじもうとせず、現地住民との交流も限られていた」と、冷静に分析している。

次に張氏は、「国交正常化から2009年3月31日までの中国からの帰国者は、総数6393世帯、2万416人である。彼らが呼び寄せた子供や孫たちなどの関係者を含めると10万人と推定される」、「彼らは帰国当時、定職に就けず、年金受給資格のない人が非常に多かった。また彼らが呼び寄せた家族らには、日本語習得はもちろんのこと、住宅、就労、子女の就学など、国の支援は皆無だった。そのため、彼らは3Kの職域に引き寄せられて行き、6割以上の残留孤児が生活保護を受けざるをえない状況にさらされていた。バラ色に映っていた祖国は、帰国した残留孤児にとってまさに幻滅の国だった」と書き、その中からやむを得ず犯罪に走るものもいたと記している。

そして永住帰国した孤児の9割近い2201人が原告となって訴訟を起こすことになったが、2007年11月に政府が新支援策を決定し、和解し決着した。張氏の取材によれば、訴訟に参加した帰国残留孤児のすべてが生活困窮者ではなく、なかには日本の生活に満足している人あり、残留孤児コミュニティへの仲間意識から参加した人もあるという。

張氏は、帰国残留孤児の現在の心配の種が、中国に残った養父母のことであり、また「敵国の子供を実の子のように大事に育てあげた中国人の養父母の存在」は、中国メディアでも感動的に取り上げられている、と記している。張氏は、本文中で、これらの養父母が残留孤児を引き取った動機について、突っ込んだ検討を加えている。従来の調査では、これらの養父母の当時の心境を、「こどもがかわいそう。助けないと死んでしまう。敵国のこどもだが、戦争は国と国との間のことで、子供たちとは関係ない」と表現することがほとんどだった。張氏は、それらの養父母にさらに聞き込むことによって、彼らが公的発言の他に、それぞれ固有の動機を持っていたことを突き止めた。それは「そのとき養母が、子供が産めない体だと自覚していた」ことであったり、「老後の頼りになりたい」など、多岐にわたっている。そして「中国では古くから、仏教の影響で、“一命を救うのが最大の善事”、“捨て子の命を救う”、“善を行う”という慈善心を大切にしていた。残留孤児を引き取って育てるとする彼らの語りは、中国の伝統文化の中で最も典型的なモデル・ストーリーである」と、記している。

いずれにせよ、多くの中国人が日本人の残留孤児の命を救い、わが子同然に育ててくれたことは事実であり、われわれ日本人は、そのことに深く感謝すべきである。

## 2. 「“中国残留婦人”を知っていますか」 東志津著 岩波ジュニア新書 8月19日

東志津氏は、この本で、戦前の日本の満州侵略をわかりやすく説明しながら、その時代に翻弄された“中国残留婦人”の生き様を書き込み、戦争の悲惨さや人間の情愛の深さ、そしてはかなさやつれなさを、描き切っている。ジュニア新書でもあり、飽食の世代に育った日本の若者に、ぜひとも読んでもらいたい本である。なお今年の正月明けに、NHKで放映された「開拓者たち」でも、満州に渡った若い日本女性の生き様が放映された。東氏を始め、今なお、あの悲惨な歴史を風化させまいとする、多くの日本人の努力が続けられていることに、敬意を表する次第である。

この本の主人公の栗原貞子さんは、「満州開拓女子義勇隊」の一員として、8か月間という約束で、1944年4月に満州に渡った。当時、政府がこの隊に課していた真の目的は、「満州の開拓団で働く若者たちの花嫁の送り込み」であった。栗原さんはそのことを何も知らされないまま、愛国心に駆られて、家族や親族の反対を押し切り、満州へ旅立ち、その後、黒竜江省の七台河市の勃利という村に配属された。

結局、そこで日本人男性と結婚することになったが、すぐに、夫は召集、ソ連参戦と続き、身重の体で満州の荒野を逃げ惑う悲惨な生活を体験することになる。地獄の逃避行を続ける中、中国人に助けられ、やがて中国人と再婚し、中国の大地に生き続けることになった。このように、当時、生きるために中国人男性と結婚した日本人女性は、推定で4000人に上るといわれる。栗原さんのその後の人生は、決して平坦ではなかったが、中国人の夫の間で、子宝にも恵まれ、1975年、31年振りに帰国した。8か月間の約束が、31年間になったわけである。

私は、この本で栗原貞子さんの人生を知り、多くのことを再確認することができた。また現在の日本の置かれている状況と重ね合わせて考え、教訓をつかみ取ることができた。

まず栗原さんが、当時の日本政府やメディアなどのウソの情報を信じ込み、その人生を決定してしまったことから、いつの時代でも真実の情報を伝えることが重要であることを再認識した。現在、日本は不況にあえいでいるため、メディアは若者に、中国を始めとする海外に雄飛することを、声高に進めている。もちろん海外で生き抜くことは重要だが、同時に大きなリスクを背負っていることも認識しておかねばならない。いざというとき、日本政府に頼り切る姿勢では、戦前同様になる可能性もあるからである。

次に栗原さんは、「開拓移民が渡った先で与えられた土地の多くは、もともとは中国人のものでした。彼らが苦勞して開墾した農地に日本人が入植したのです。土地や家屋を奪われた中国人は、その後、小作や苦力(日雇い労働者)として日本人のもとで働くことになりました」と言い、敗戦と同時に、「これまでの日本人の蛮行に恨みを抱く中国人がいる一方、手をさしのべてくれる中国人も大勢いました」と語っている。私もこれまで多くの人から、「あのとき中国人に助けられ、生き延びることができた」という話を直接、聞いている。また栗原さんのように、3人の子供の命を救うために、中国人男性の妻となった女性のことも、当人の娘さんから話を聞いている。その中国人の男性は、「日本へ帰国ができるようになったら、母子いっしょに返す」という約束をしっかりと守ってくれたという。このように多くの中国人男性が日本人女性を助け、残留孤児を引き取って育ててくれたという事実に対して、日本人はこれらの多くの中国人に心から感謝しなければならないと、私は思っている。

さらに栗原さんは、「“行くなと止めたのに、帰ってこられなくなったのは自業自得”とまで言う親戚に身元引受人を頼むわけにはいかなかった」と言い、日本人のつれなさを嘆いている。私は同じような言葉を、他の引き揚げ男性からも、直接、聞いたことがある。満州の土地から、命からがら帰国したのに、「お前たちは、“一攫千金を夢見て満州へ渡った”のだから、自業自得だ」と言われ、故郷には寄りつけなかったという。これなどは、日本人の薄情さを際立たせている。中国の大地で中国人に助けられ、日本の故郷の地で日本人同胞に白い眼で見られたというこの体験を、現代に生きる私たち日本人は、日本人のモラルの問題として、深く問い直さねばならないのではないだろうか。

### 3. 「日本に引き揚げた人々」 高杉志緒著 図書出版のぶ工房 12月24日

帯の言葉：「博多港には、139万人の引揚者が上陸した」

この本は、終戦後、朝鮮や中国東北部から、博多港に引き揚げてきた人たちや、その方々を港でお世話した人たちの記録である。それぞれに生々しい実態が語られており、貴重な歴史の告発ならびに証言集となっている。著者の努力に多いに感謝する次第である。

第2章では河野愷氏が、「振り返ると私の若き日々は、激動する歴史の荒波と生活苦の疾風に翻弄される小舟のようなものであった。有無をいわず歴史が動く先端に身を置かれ、引き回され続けた。“死の恐怖と飢えの苦しみ”から脱出しようと、もがき続けた日々であった。当時からみれば、今の毎日の生活は益か正月のようだ。“死の恐怖と飢えの苦しみ”など、現代を生きる若者には実感が湧かないだろう。私は今まで自分の体験についてほとんど語って来なかった。思い出したくなかったからである。そうはいっても私はまだ幸運な方であろう。最も苦しみ、悲惨な体験をした者は、殺されたり死んだりして語ることはできない。全ての原因は“戦争”にある」と語っている。この河野氏の言葉通り、私たち戦後世代は、“死の恐怖も飢えの苦しみ”もまったく体験していない、それどころか同氏がもともと戒めようとした、「戦争への道」を再び歩もうとしている。私たちは、どんなことがあっても、「戦争への道」を断ち切らねばならない。

さらに河野氏は、ソ連軍に続いて、八路軍、そして国府軍下で生活し、ソ連軍の悪逆非道に耐えかねていた同氏は、軍紀厳正な八路軍に驚き、それに劣らぬ厳正な軍記を保ち、かつ装備が格段に勝っていた国府軍を目の当たりにしたという。

第1章では森下昭子氏が、朝鮮から引き揚げ時に、父親の教え子の朝鮮人に助けられたこと。またその人たちが、その後、「親日家」として袋叩きにあったことなどを、語っている。日本人は朝鮮人にも、ずいぶん助けられたのである。

第4章では村石正子氏が、朝鮮から引き揚げ後、博多港で看護婦として引揚者の世話に従事していたときの経験を語っている。そこには引揚者の想像を絶する悲話が語られている。

#### 4. 「川島芳子 知られざるさすらいの愛」 相馬勝著 講談社 2012年1月20日

帯の言葉：「清朝の皇女、満州の女スパイ、そして中国国民党の“スリーパー”に

はじめて明かされる“男装の麗人”望郷の全人生」

私は帯に書いてある「スリーパー」という言葉の意味が、よくわからなかった。本文中にもなかなか出て来なかったが、やっと244ページに、「任務地で長期間普通の生活をしながら指令を待つスパイ」という意味だと書いてあった。つまりこの本で相馬勝氏は、川島芳子の生涯は、前半が「男装の麗人」としての表舞台での活躍、後半が「スリーパー」としての裏舞台での暗躍？であったと書いているのである。そして分量としても、ちょうどこの本の前半部分で「男装の麗人」、後半部分で「スリーパー」としての川島芳子を扱っている。しかし読み物としては、前半部分の方が圧倒的におもしろい。

数年前、私は、1949年に処刑されたはずの「男装の麗人 川島芳子」が、実は1979年まで長春市郊外で、生きていたという報道を目にして驚いた。なぜなら私は小学生のころ、父親に連れて行かれた映画館で、「東洋のマタハリ 川島芳子」？という映画を見たとき、たしかに最後に処刑されたような場面を見たような記憶が残っていたからである。また美人で数奇な運命を持つこの女性に興味があったからでもある。なおこの川島芳子について、最近の研究では生存説が有力となっている。しかし替え玉処刑までして、「国民党が川島芳子を生かした目的」を、「川島芳子が身代わりを立てられて処刑を免れることができたのも、スリーパーとして利用するためでした。国民党が大陸に復帰後、彼女の名声や人脈、組織力、その筋筋など利用する目的があったと考えたと納得がいくのです」と、相馬氏は書いているが、若干、インパクト不足のような気がする。

なお川島芳子は、よほど男好きのする女性であったらしく、日本軍部の男性を始めとして、日中の多くの男性が彼女の手玉に取られている。ことに孫文の長男の孫科までも彼女の誘惑に負け、国民党の重要情報を告げてしまったという。また相馬氏は本文中で、満州国でも、共産党支配地域でも、アヘンの売買が大きな収入減だったと書いている。満州国におけるアヘンの流通については、すでに研究者も多く疑問の余地はないが、「延安では毛沢東の許可のもと、阿片が生産されていた。…(略)。このようにして作られた共産党の阿片は1年間で120万両つまり43トンにも及び、現在の貨幣価値で18億円に相当」という記述は、精査が必要であると思う。

#### 5. 「はじめてのノモンハン事件」 森山康平著 PHP 新書 2012年1月30日

帯の言葉：「なぜ、闇に葬られたのか？ 日本の組織が抱える“無責任”がここにある」

この本には、ノモンハン事件の戦闘過程がわかりやすく書いてある。また森山康平氏は、「日本が中国を侵略している事実は、あまりにも明かだった。道義的にも政治的にも、日本の侵略行為はどの国からも非難されていたのだ」と書き、あの戦争の本質を明確に示している。

森山氏は、第一次会戦のあと、ソ連軍の増強の様子を見て、関東軍作戦課内部で、慎重派と積極派とに意見が分かれたと、次のように書いている。「慎重論は作戦課長の寺田雅雄大佐で、しばらく静観すべきだと述べた。これに対して積極論を展開したのが辻政信参謀だった。結局は辻参謀の気迫に押されてか、作戦課は一致してソ連・モンゴル軍に大打撃を与えることに決した」。かつて私が師事した皆川節夫陸軍大尉は、「どうしても作戦会議では、勇ましく声の大きい人間の主張が通ってしまった。それは主戦論であることが多く、妥協戦術や撤退戦略は声が小さくならざるを得ず、もともと理性的でなければならない作戦会議が、感情論で押し切られることが多かった」と、いつも反省しておられた。おそらくこのノモンハンの作戦会議でも同様だったのだろう。

なお森山氏は、「このノモンハン一帯が広大な高原であり、豊かな草原地帯である」と書いている。満州研究家の安部桂司氏によれば、この一帯は金を含む地下資源の宝庫であり、その争奪戦がノモンハン事件の真因であったという。

以上